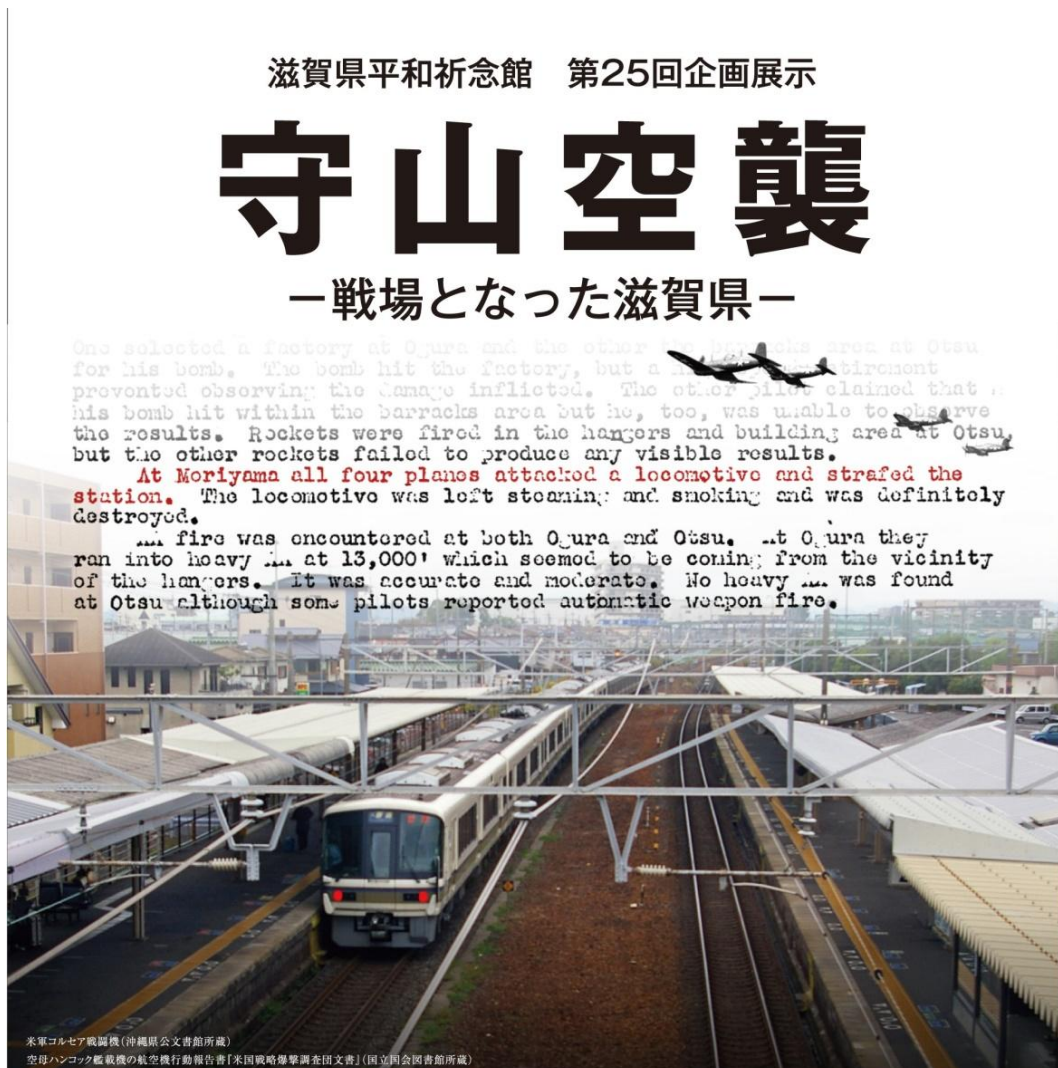


滋賀県平和祈念館 第25回企画展示 守山空襲 (会期：令和2年1月8日～7月12日)



ごあいさつ

古くから中山道の宿場町として栄えた守山は、ホタルが舞い飛ぶ清流の町でした。豊かな水田が広がる守山では、戦時中にあっても、都会ほど食糧事情がひっ迫しておらず、大阪市からの疎開児童を受け入れるなど、つらい時代にあっても比較的、平和な日常の暮らしがありました。

昭和20年(1945年)7月30日午後、守山は空母ハンコックから発進した戦闘機によって空襲を受けました。守山駅を発車した列車を狙った機銃掃射によって、乗客や駅周辺の人々が犠牲となりました。その数は、確認されているだけで死者11名、負傷者22名。県下の空襲被害としては、大津市の東洋レーヨンに落とされた模擬原爆に次ぐものでした。

今回の企画展示では、空襲を体験された方々の証言やモノ資料などによって、その実態を紹介します。

最後になりましたが、今回の企画展示におきましては、守山市、守山市教育委員会、一般社団法人滋賀県遺族会、栗東歴史民俗博物館、守山市本町自治会、川端美臣様より多大なご協力を賜りましたこと、深くお礼申し上げます。

令和2年1月8日

滋賀県平和祈念館

第1章 戦時下の守山

清流と街道の町『守山』

野洲川の清らかな伏流水が豊富に湧き出る『守山』の地は、弥生時代から続く穀倉地帯です。近年まで、湧水は灌漑用水のほか、生活用水として人々の暮らしに用いられました。

江戸時代、中山道 67 番目の宿場町として『守山』は、京都や江戸を行き来する人・物で賑わいました。宿場内の東門院は、日本と朝鮮の友好親善使節である朝鮮通信使の宿舎にもなりました。守山は文化・外交の要衝だったのです。

明治になると、守山は地域商業の中心地へと変貌を遂げます。年 2 回の「守山いち」では、生活物資や盆・正月用品を買い求める人が溢れ、大いに賑わいました。

戦前の守山では、初夏の小川にたくさんの源氏螢が乱舞する光景が見られました。明治 40 年（1907 年）から皇室に献上された守山の源氏螢は、大正 13 年（1924 年）に天然記念物に指定され、多くの観光客が螢見物に訪れました。

明治 45 年（1912 年）には、国鉄東海道本線に新たな駅（守山駅）が造られ、それを契機に駅周辺で工場（江州煉瓦株式会社やグリーンピースの缶詰工場など）が建設されました。

戦後、工業地域として発展した守山市では一時期、工場排水による水質悪化のため螢が絶滅しましたが、近年、住民と市が連携した水質改善運動により、清流と螢が復活を遂げつつあります。



戦前の守山の広告・チラシ

ポスター「兎びす講大売出し」、映画館「大黒座」のチラシ、守山警察署のチラシ「歳末盗難予防」



守山小学校付近にあった湧水地（尼ヶ池）で遊ぶ子供たち
〔小島秀治郎さん提供〕



守山駅近くのれんげ畑での農作業〔小島秀治郎さん提供〕



商店街の賑わい（旧中山道守山宿・昭和 31 年 9 月 10 日撮影）
〔守山市所蔵写真〕



中山道守山宿〔当館撮影〕

戦時下の守山

太平洋戦争がはじまると、軍事物資を優先する政策や多くの人たちが兵士として動員されたことによる労働力不足のため、様々なモノが不足しました。昭和17年(1942年)には、食糧管理法によって、米麦やイモ類、大豆などの雑穀等の主要な農産物は、自分の家で食べる物以外、強制的に政府に売らなければならなくなりました。

守山でも学生や若い女性たちが食糧増産や軍需工場への勤労働員を強いられました。当時、栗太農学校生だった小島秀治郎さんは高砂製作所(草津市)で農作物(イモ)の栽培、Nさん・竹村芳子さんは東洋レーヨン石山工場(大津市)で魚雷等の製造などを行っていました。

古くから人々の心の拠り所であった寺院などにも戦争の暗い影が及びました。戦時中、兵器などの材料とするため、多くの寺院が梵鐘や金属製の仏具を強制的に供出させられました。永願寺(伊勢町)や常念寺(下之郷2丁目)などには供出品の代わりとして渡された陶器製の花器が残されています。

昭和19年(1944年)になると、米軍による大阪や東京、名古屋などの大都市への空襲が始まりました。そうした空襲を避けるため、大阪市の国民学校の児童が滋賀県にも集団疎開してきました。守山では勝部国民学校が大阪市栄国民学校の疎開児童を受け入れました。



永願寺旧本堂〔永願寺提供〕

【体験談—疎開児童とホタルの里に移り住んで】

山口 とし子さん(守山市)

山口としさんは大津市膳所のお寺に疎開した大阪市栄国民学校の寮母さんをされていました。

昭和19年(1944年)9月に、栄国民学校の50人ぐらいの子たちがお寺に集団疎開してきてん。寮母やから子供たちの食事を朝昼晩、私が作ってた。大変やったで。けんかせんように、きちんと量って作ってたんや。

「高島の饗庭野(演習場)があるので爆弾が落とされる」ゆう噂が出た。膳所に爆弾が落ちるさかいあかん」ゆうて、守山に頼まはったんですわ。昭和20年(1945年)3月、守山の伊勢の永願寺に(移って)来ましてん。その時は、50人ぐらいの子どもが本堂にごろごろと寝てましたわ。4月頃になると、宝善寺に大勢で住めるようにお風呂やら炊事場を作ってくれてはった。それで、宝善寺の宿舎へ移りましたんや。

当時、お米は「何人分」ゆうて、学校からキッチンと来てましたから、米だけは不自由せなんだね。おかずは足らんけど。膳所の時は、貰うとこなかったけど、守山に来てからは、牛蒡とかの間引きしたのやらをくれたり、「豆が取れたから」ゆうて豆をよけ(多く)持ってきてくれはった。守山も供出やったけど、「やろう」いつてくれはった。

守山はゲンジボタルの名所やったから、6月になると、ぼんぼんぼんぼん、飛んどった。いっぱいおってん。子供たちは街の子やから珍しがってた。ほんで、喜んで、喜んで、掴んでたんや。すぐ、死んでしまうのにな。

お洗濯やらも川でしてたで。大きなたらいで洗って、濯ぐのはその川でするねん。あの頃は川の水がきれいやってん。

休みの日に子供たちを連れて三上山に登ったりしたな。大阪から来た子やから、滋賀県のこと見せたら思たし、よう行ったな。三上山。

子供たちはなんかいうたら、「先生、歌、歌って。」てな。「♪ここはお国の何百里♪」て、いい歌やのうて、そういう歌しか歌えへんかったけど、子供たちを寝かして、歌ってましたんや。みんな知らん間にすーっと寝てたわ。

3月の大阪の空襲で、ある子供の両親が2人とも

死なはったんや。面会日にみんなの親が来はるけど、その子の親は来はらへんわな。「うちのお母さん、来はらへんわ。なんでやろ」と言われて、「なんでやろな」いうて、ごまかしてな。あの時はかわいそうやってな。忘れられんな。



疎開児童と山口とし子さん（膳所で撮影）

〔山口とし子さん提供〕



宝善寺〔当館撮影〕



金属供出に出した仏具の代わりに渡された
陶器製の花入れ〔S子さん提供〕



永願寺の半鐘〔永願寺提供〕

戦後、供出した半鐘とは別の鐘が永願寺に戻ってきました。鐘上部右側の区画（削り取られた部分）にもとのお寺の名前が書かれていたと思われます。

【体験談—戦時中のお寺の出来事】

S子さん（守山市）

昭和20年（1945年）3月頃から、永願寺に疎開の方（疎開児童たち）が大阪から50人ほど来てはりました。本堂を貸しましたわ。子供たちは本堂の外陣にずーっとおふとん敷いて、雑魚寝で寝てやしたでね。ここから先生もついて、物部国民学校へ集団で行かれましたわ。

それで、うちの座敷が本堂代わりになって、阿弥陀さんを座敷にお移して。大変でしたけど、あの時分は一生懸命でしたさかい。

風呂は外から焚く昔のお風呂がありましたんやけど、私とは焚きもん（燃料）が続きませんのや。毎晩、（子供たちをお風呂に）入れたげられしません。そしたら、近所の奥さんが、「自分の主人が戦争に行っはるさかい」いうて、毎晩、お風呂に入れたげはりましたな。

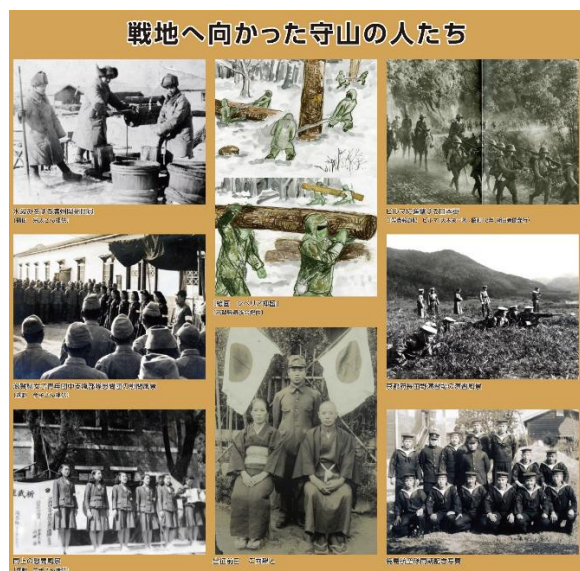
主人は、釣鐘堂の向こう側に穴掘って、防空壕を作ってくれましてね。そこにゴザ敷いてね、「飛行機が飛んできたら、ここへ隠れんねや」いうてね。B29が飛んでくると、ほんまにそこら歩いてられませんでした。晩も暗がり（真っ暗）にして、電気には黒い布を被せてね。晩にいつぺん（防空壕に）入っ

たことあります。電気は、いつも黒い布を被せてましたけど、電気消してね。子どもとおばあさんとで縮こまってましたな。

主人も召集されましたけど、出征の時は親類や門徒の方が泣きもって（泣きながら）来てくれてね。守山駅まで送ってくれはりました。門徒の方が「もろてきたげた（貰ってきた）から、お腹に巻いてもろて。」といって、千人針を持って来てくれはりましたわ。

当時は、本堂のお道具やらもみんな（金属）供出で出しましたわ。金持ちのお家は「大事な物はワラで包んで屋根裏へ隠しとく」とか言ってましたけど、うちのご縁さん（住職）はそういうことが嫌いでしたしな。みんな（金属供出で）出さはりましたわ。ほんで、黒い瀬戸物の花立てを代わりにくれはったんですねん。釣鐘も半鐘も茶釜やらも供出で取られてね。

半鐘は出しましたんですけど、（終戦後に）^{ふけ}浮気かどこかのお寺の名前の書いた半鐘が戻ってきたんです。うちの半鐘はどこへ行ったか、入れ替わってますわ。釣鐘もだいぶあとになってから、門徒の方が（新しい梵鐘を）買ってくれはりましたけどな。



展示バナー：戦地へ向かった守山の人たち 水汲みをする満州開拓団員、滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問団の慰問風景、同上の慰問風景、「絵画 シベリア抑留」、出征前日 ご両親と、「ビルマに進撃する日本軍」（『写真報道記 ビルマ』から転載）、京都府長田野演習場の演習風景、鹿島航空隊同期記念写真

第2章 戦地へ向かった守山の人々



中央：Oさん（守山市）の病衣

Oさんは、国鉄職員として勤務していた昭和14年（1939年）12月に召集され、陸軍歩兵第9連隊に所属し、揚子江沿岸警備などに従事しました。

昭和16年（1941年）7月30日、敵の手榴弾の破片を左足首などに受けて負傷し、大津陸軍病院での1年以上の入院を余儀なくされました。病衣はOさんが入院中に着用していたものです。

左：小林育三郎さんが戦地で着ていた軍服（陸軍服上衣、軍袴、軍帽）

補給のないビルマ戦線や捕虜収容所で着用していた軍服です。破れた部分を自分でぬい合わせていたそうです。

手前のアクリルケース内：小林育三郎さん資料

戦地や捕虜収容所で使用していた水筒やコップ、小鉢、弁当箱などです。日記は武装解除の時に没収されないよう、小林さんが土に埋めて隠して日本へ持ち帰ったものです。

【体験談—ビルマでの忘れがたい出来事】

小林 育三郎さん（守山市）

小林育三郎さんは、昭和13年（1938年）の召集後に、陸軍予備士官学校に進みました。昭和19年（1944年）4月、小林さんの部隊はビルマ戦線の戦闘に参加しました。

戦場では歩兵は全くの消耗品やった。私の部下は次々と倒れていきました。

退却の最中、集落の空き家を見つけて、ぐっすり寝込んでいた時に空襲を受けたんや。私も市川上等兵も家から転げ出て、遮蔽物の近くに伏せたけど、隣の市川が太股に銃弾を受けたんです。出血は止まらず、顔色が見る見る土色となっていきよった。最

期に「おかあちゃん」といって息を引き取ったんや。たった 30 cmの差が生死の分かれ目となったんです。

メーカーレー飛行場争奪戦で戦死しはった草津出身の青地中隊長は、新婚ほやほやで、いつも奥さんの写真をポケットに入れていて、みんなに見せてたんです。「どうや、ベッピンやろ」と自慢してはった。奥さんから「男の子が生まれた」との便りが来てからは「ベッピンの子やから、坊やは男前やろ」といってはったけど、戦死しはったんや。戦闘の最中でしたんで、大隊本部から「ただちに小林中尉は中隊長の位置につき、中隊を指揮せよ」との命令が届いたんです。私は部下1人を連れて、中隊長のいた場所へ移動しました。そしたら、5分ほど経って、敵戦車が来よった。ついさっきまでいた陣地を戦車砲で攻撃しよったんです。陣地に残した9名の部下がいっぺんに吹き飛んだんです。いまだにその時のことは忘れられませんわ。

部隊はシンガポールに上陸してから、何一つ補給を受けられへんかったんです。着衣は饗庭野を出たときのままだ。上着は何度も、何度も継ぎ接ぎして着てましたんや。日本まで持ちかえって、記念の品として大事にしてるんです。

そんでその頃、ずっと日記を付けてたんや。昼間は隠れてたさかい、何もすることがなかったから、時間は結構あったし、動くとも腹減るから、合間に日記を付けてたんや。みんなは「日記なんか付けてどうするんです。どうせ死ぬんやないか」といってたけど。「まあ、生きているという証のようなものや」といってましたわ。まさか、生きてこの日記帳を持ち帰れるとは思っていなかったけど。武装解除の時「書類は皆燃やせ」と命じられましたが、整列したとき、足元の土を少し掘り下げそこへ日記帳を埋めたんです。これは私の宝物です。私が書いた『ビルマ戦場日記』は、これを元にしたもんです。

【体験談—シベリア抑留】 Kさん(守山市)
昭和20年(1945年)8月、Kさんはソ連軍の捕虜となり、シベリアのテルマ収容所に抑留されました。展示している継ぎはぎだらけの服は、当時、Kさんが収容所で着ていたものです。

軍服と違いますよ。軍服なんてあらへんさけ。これお満服(満州の服)。ソ連はこういう着類がないさかいに、皆、満州から持って帰ったもん(没収した服)を渡しとる(支給したものです)。継ぎはぎは、全部、自分で直したもんや。みんな、全部自分のもんは自分でしたんや。

(収容所での) 朝晩の食事は、飯ごうの蓋に一杯ほどのスープ。葉の形なんてもん全然あらへん。どろどろとしたスープ。それで昼だけが黒パン350グラムが付く。ちょうどマッチ箱の2つほどの分量や。

朝、起床の鐘が鳴んねん。すると、みんな、「おい、起床やでよ」と起きるんやけど、もう音沙汰ない人(死んだ人)がいて、しばらくすると、担架で持って行きよった。どこへ連れて行きよるか知らんけど、担架で持って行きよったんや。思うとかわいそうや。凍っているから穴掘れへんねん。



Kさんが収容所で着ていた軍服(防寒帽、上衣、防寒袴)



Kさん資料 スプーン（袋付き）、食器2点
シベリア抑留時に使っていた食器です。

【体験談—滋賀県代表として中国の部隊を慰問】

善野 令子さん（守山市）

善野令子さんは昭和18年（1943年）、兵士慰問のために滋賀県が中国へ派遣した中支嵐部隊慰問団員として、約3ヶ月間、各地の部隊を回られました。

京都と滋賀で慰問団を送ったんです。京都府は芸人を頼んだんですが、滋賀県は何百人もの女学生から県代表を選びはったんです。私は7人残った中の栗太郡・野洲郡の代表でした。

舞台では、兵隊さん達はどんなに暑くても、身動きもなさらないで、最後まで聞いていました。「御武運長久をお祈り申し上げます。ありがとうございます。最後に兵隊さんと一緒に「海ゆかば」を歌います。」て、いいますやろ。兵隊さん感動してね、皆泣かれましたわ。

兵隊さんから家族へ伝えてほしいとお願いされたこともあります。手帳にメッセージを書いてもらって、「これご主人様から言づかってきましたお手紙です。」ゆうて、京都まで伝えに行ったら、奥さん泣かれました。



善野令子さん資料

従軍手帖、「昭和十八年滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問行」



善野令子さん〔善野令子さん提供〕



善野令子さんたちの慰問団〔善野令子さん提供〕



Mさん資料

図囊、ゲートル、Mさんから国防婦人会杉江班への手紙

インパール作戦に参加されたMさん（守山市）

Mさんは昭和12年（1937年）、召集により陸軍歩兵第9連隊に入隊し、南京攻略戦に従軍されました。

昭和14年（1939年）に高熱のため入院除隊後、昭和18年（1943年）に再び召集され、ビルマのインパール作戦に参加しました。

戦場では砲弾の破片を頭部に受けるなど、たびたび命の危機に晒され、昭和20年（1945年）8月8日にタイで捕虜となった後、守山へ帰郷されました。

第3章 日本本土への空襲

米軍の日本本土への空襲

昭和19年(1944年)、サイパン島を占領した米軍は11月24日より、マリアナ諸島から日本本土へB29爆撃機による空襲を本格的に開始しました。

軍需工場への精密爆撃で思うような成果を得られなかった米軍は、昭和20年3月10日より東京や大阪・名古屋など7大都市の市街地への焼夷弾による無差別攻撃を行いました。

大都市を燃やし尽くした米軍は、B29による焼夷弾を使った空襲の魔の手を、6月17日以降、全国の中小都市(和歌山市・津市・堺市など57都市)に広げました。

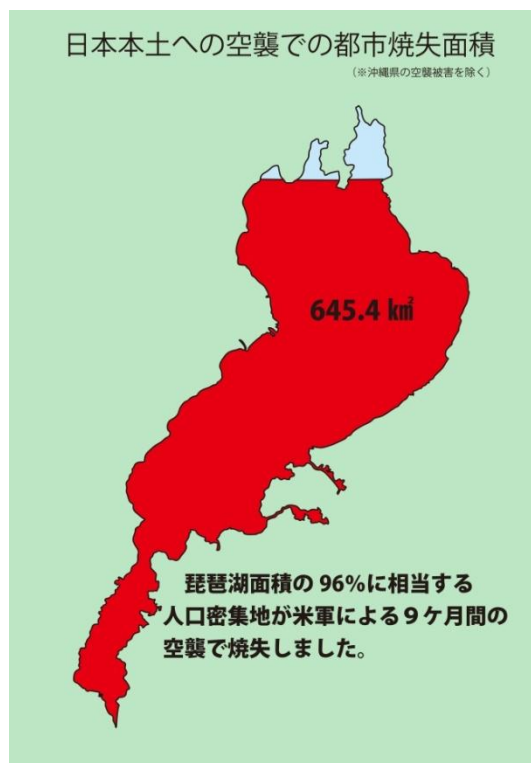
7月14日からは空母艦載機による日本本土への空襲も始まりました。艦載機による空襲は、B29の射程圏外の北海道・東北を標的としたほか、日本各地の飛行場・軍港・軍事基地や停泊中の軍艦・輸送艦、飛行機工場などの軍需工場、機関車などを広範囲に攻撃しました。

米軍は原爆投下訓練のため、大津市など全国30都市(49発)に模擬原爆を落とした後、8月6日には広島、8月9日には長崎へ原爆を投下しました。

米軍の空襲による日本本土の都市焼失面積(沖縄県を除く)は、琵琶湖の総面積670.3km²に匹敵する645.4km²に及びます。空襲による死者数は判明していませんが、その数は約24万人～約51万人と推定されています。



米軍が空襲に使用したもの(焼夷弾の筒、爆弾と見られる金属片、機関銃弾破片、薬莢2点、伝単「空襲予告この都市が」)
米軍機が空襲で使用した焼夷弾とその薬莢、爆弾の破片とみられる金属片です。これらは実際に滋賀県で使用されたものです。伝単(チラシ)は、米軍機が上空から空襲を予告するためにまいたものです。



第4章 空襲への備え

空襲に対する備え

戦争中、国民は空襲で自らの命を犠牲にしても町や軍事基地・軍需工場を守ることを強いられました。

防空法によって、夜間空襲の目標となる室内の明りを外に漏らすことや、空襲前に無許可で避難すること・空襲を受けた場合に消火活動をせずに避難することなどが禁止され、違反者には懲役刑などの重い処罰が課せられました。こうした灯火管制や消火活動は、町内会や隣組で連帯して行うことが求められ、人びとは町内会の防空訓練や消火訓練への参加を強いられました。

米軍の焼夷弾は、木造家屋を燃やし尽くすために開発された爆弾でした。爆発によって高温で燃える油脂を広範囲にまき散らすため、水での消火が困難であることを政府は知っていましたが、国民に恐怖心を抱かせないため、「焼夷弾も心がけと準備次第で容易に…消し止め得る。」(『時局防空必携』昭和16年、情報局発行)として、砂や濡れムシロを爆弾にかぶせた上、バケツやヒシャクなどで水をかければ容易に消火できると伝えました。また、防空壕も空襲後に素早く消火活動へ移るための「一時的な待避

所」とされ、自宅周辺や家の床下に簡易なモノを造ることが奨励されました。こうした誤った情報や方針によって、多くの方々が空襲で命を失いました。



第4章関係展示資料 火たたき棒、防空団屯所の旗など



展示パネル：国民防空図譜



空襲時の消火活動に使われた道具

防火用砂袋、防火アンプル、十七年式防空用防毒面、防空頭巾、布製バケツ



空襲に対する日常の備え(『時局防空必携』、灯火管制用電球、防空電灯カバー)

夜間空襲の標的とならないように、町全体で灯火管制が行われました。電灯の明りが下だけを照らすように電灯カバーや灯火管制用の電球が使われました。

『時局防空必携』は、政府が国民に向けて発行した空襲に備えるための防空指導書です。

『時局防空必携』内容要約

一、防空精神

どんなに備品を準備していても、精神がしっかりしていないと役に立たない。空襲から国を守るためには、**老人も子供も男性も女性も、すべての国民**が次の心構えを持つこと。

1. すべての国民が「国土防衛の戦士である」との責任と名誉を自覚すること。
2. お互いに助け合い、力を合わせて**命を投げ出して**日本を守ること
3. 必ず日本が勝つとの信念をもって、**持ち場を守る**こと。
(空襲時の消火活動を行うこと)



戦時中の防空訓練(愛荘町内にて)〔木津龍尊さん提供〕

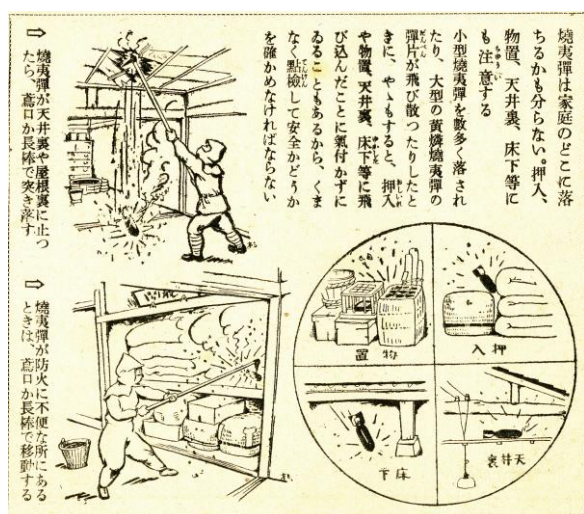
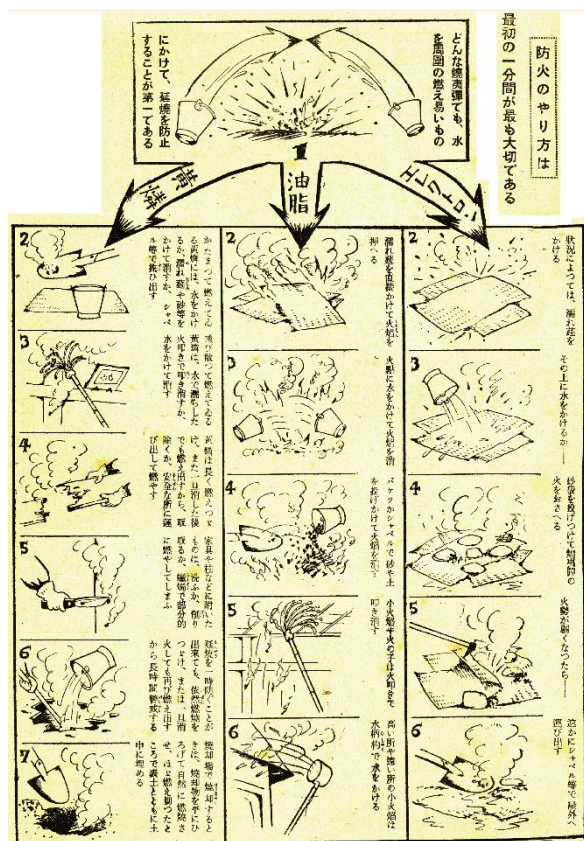
焼夷弾が落ちたら

戦時中、『写真週報』に掲載された焼夷弾の消火方法です。

1分以内に、ぬれムシロで爆弾をおおい、水・砂などをかけて消火するように指導しています。

実際の焼夷弾は、発火の数秒で、周囲を火の海にし、テルミット焼夷弾の場合、水をかけると大爆発を起こしました。

下の記事では、国民が焼夷弾の威力を非常に弱いものであると誤認させるため、「投下された焼夷弾も容易に対処できる」とする内容になっています。



『写真週報』第283号 昭和18年8月4日、情報局発行

地域での防空活動・防空訓練

地域での敵機の発見や警報の伝達、空襲時の消火活動は町内会や隣組の任務でした。町内会では、防空活動の責任者『防空町内会長』を置き、防空訓練を実施しました。



訓練用「空襲警報」札、腕章「防空町内会長」、防空日誌、防空要員証

第5章 滋賀県への空襲

昭和20年（1945年）5月14日午前、名古屋を攻撃目標とした通過中のB29部隊によって滋賀県が初めて空襲を受けました。この空襲では、守山市～野洲市湖岸部などへ焼夷弾が投下され、機銃掃射（彦根市・甲賀市）により8人が負傷しました。その後、7月19日までの散発的な空襲は、周辺都市（名古屋市や岐阜市、福井市）への通過中のB29部隊による攻撃と考えられます。

7月中旬以降、米軍の主力空母部隊（第38任務隊）は、本土上陸作戦の障害となる各地の飛行場や軍事基地、航空機工場、機関車などの輸送手段を計画的に攻撃・破壊しました。

テニアン島の部隊による大津市石山への模擬原爆投下と第38任務隊による県内の軍事基地への攻撃のスケジュールが重なった7月24日～30日は、県下の空襲で最も多くの人が死傷した「魔の1週間」だったのです。

24日午前7時30分頃、その始まりを告げる模擬原爆が東洋レーヨン石山工場へ投下されました。午前8時頃には、空母ハンコックの艦載機による陸軍八日市飛行場や周辺への攻撃が開始されました。空

母艦載機による攻撃を受け、7月30日午後までには、八日市飛行場や大津海軍航空隊などの主要な飛行場・航空基地がほぼ使用不能となりました。

守山駅・守山の町はこうした状況の中で襲撃されたのです。



展示パナール：滋賀県への空襲



日本軍の機関砲弾・高射砲弾（薬莖）

空母艦載機によって攻撃を受けた陸軍八日市飛行場跡で拾われた日本軍の機関砲弾・高射砲弾の薬莖です。

【体験談—7月24日 東洋レーヨン石山工場への空襲】 I さん（大津市）

終戦までは、（瀬田でも）B29 がグワーと編隊で通って行ってましたんや。「何処へ行くんやろうと、敦賀の方に行ったのかな」て、思ってたけど、機銃掃射もなしやし、（爆弾も）落ちもせんかって。だから逆に、石山の東洋レーヨンに一発（模擬原爆が）落ちたのがショックだったんです。

高橋川の（瀬田川沿いの）砂地に一列に並んで高射砲台があったんです。30～40名の兵隊がおりましたけど、撃っても届かへん。撃ってましたけど、田

舎の花火じゃないけど、B29 が上の方を飛んでるのに下の方でボッカーンいうてました（爆発してました）。

私らは旧制中学校の生徒だったので、学徒動員で東洋レーヨン滋賀工場へ行っておったんです。（7月24日）朝の8時半ちょっと前に、正門の前まで来たところで、警戒警報のサイレンが鳴ったんです。みんなで御霊神社の中の防空壕に向かったんですが、この辺は爆弾が落ちたことが無いからね。やんちゃ坊主たちは防空壕の外側で見えおったんです。そうしたらたった1機のB29が飛んで来て、何か落ちて来たんですわ。暫くワーワー言うておったんですが途中で、「爆弾やー」と、慌てて防空壕の中に入っ

たんです。爆弾が落ちる瞬間は、空気を切るズザーという音がして、ドッカーンと跳ね上がりました。とにかく物凄く砂煙が上がったような気がしましたわ。上からバサーと、ザラザラ、ザラーと砂が頭の上に落ちましたから。

あたりが落ちていて表へ出てみたら、若い女の人が血だらけで髪を振り乱して、半狂乱ですわ。血だらけの人を爆弾の直撃を受けた場所から連れて来はりました。

私は、魚雷を作ってた工場の製図事務所で図面の一部を書く仕事をしていましたが、その付近に爆弾が落ちたんです。10人ほどの事務所でしたけど、爆弾から以降は、皆さんに全然会えませんでした。

後日、整理に行けと言われて、中に入ったんですが、1人もおられなくて、「誰々さんはどこへ行ったんです」と聞いたら、「皆病院や」って、いわれました。僕だけ無傷で助かったんです。

空襲の後、点呼したら同級生の1人が行方不明だったそうです。即死でした。僕が見に行った時には、事務所にまだ残ってましたからね。肉の固まりが…。夏ですから腐って…。直撃を受けた所の警備員さんも何人か即死でした。爆弾が落ちた後を見たら、6畳くらいの大きさの穴が掘れてたんです。

【体験談—守山で聞こえた爆音】

T子さん（守山市）

T子さんは当時、小津国民学校（現在の市立小津小

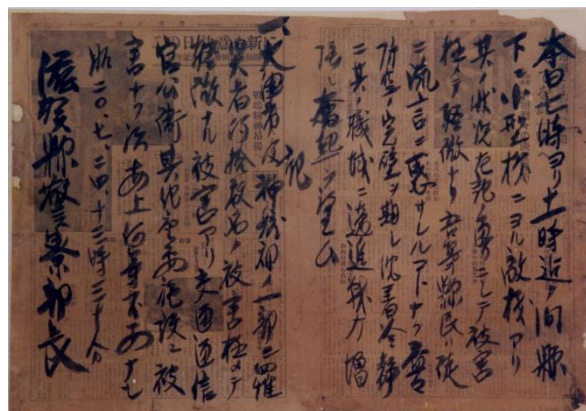
学校)の教師をされており、守山駅近くのご自宅から学校に通勤されていました。東洋レーヨン滋賀工場の爆音を聞いた6日後に更なる恐怖を経験するとはいづ知らずに……

石山の東洋レーヨン工場に爆弾が落とされた時は、飛び上がるような大きな地響きがしましたんや。宇治の火薬庫が爆発したのかと思ってましたけど、あとになって、東レに爆弾が落ちたということが分かりましたんです。

それからは、勤労奉仕に出ている警報が鳴ったらすぐ田んぼの中などへ隠れ込んでましたわ。



T子さん



「空襲被害の状況につき滋賀県警察部長揭示」

〔里内文庫資料 栗東歴史民俗博物館所蔵〕

空襲を受けた7月24日に栗太警察署前に掲示されました。

【読み下し文】
本日七時ヨリ十一時迄ノ間縣下
ニ小型機ニヨル敵機アリ
其ノ状況左記ノ通りニシテ被害
極メテ輕微ナリ吾等縣民ハ徒ニ
流言ニ惑サレルコトナク益々防
空ノ完璧ヲ期シ沈着冷静ニ其ノ
職域ニ邁進戦力増強シ奮起ヲ望
ム
記
一、大津市及神崎郡ノ一部ニ罹災
者約拾数名ノ被害極メテ輕微ナ
ル被害アリ交通通信官公衛其他
重要施設ニ被害ナク治安上何事
不安ナシ
滋賀縣警察部長
昭二〇、七、二四、十三時三十分

【体験談—7月30日 大津陸軍少年飛行兵学校への空襲】

尾形 重男さん(大津市)

大津陸軍少年飛行兵学校の教官だった尾形重男さんは、昭和20年(1945年)7月30日昼ころ、学校の将校集会室で昼食を取っていました。

空襲警報は出ていなかったが、艦載機2機が京都方面から長等山沿いに低空で飛来してきた。突然「バリバリッ」と音がして、「バーン」とロケット弾の炸裂する音がしたんです。

とっさに窓から飛び出し、食堂から出てきた生徒たちの方へ走りながら、大声で「伏せろ」と、皆を地面に伏せさせました。生徒舎の屋根には機関銃座がありましたが、迎撃するはずの兵士は来襲に驚き、逃げ出していたんです。

この時、ロケット弾が倉庫(靴などの修理工場)と線路を隔てた練兵場の脇に落ちました。倉庫が跡形もなく飛び散り、(大津市)坂本の女性が1人亡くなりました。米軍機はその後、滋賀海軍航空隊も襲撃しました。



大津陸軍少年飛行兵学校跡の「若鷺の碑」〔当館撮影〕

第6章 昭和20年7月30日 戦場となった守山 守山空襲

米軍空母艦載機部隊(第38任務隊)による空襲は、事前に決められた軍事基地などの第1目標への攻撃が天候などにより困難な場合や、早期に攻撃目的が達成できた場合、部隊長の現場判断で「臨機目標」(周辺の軍需工場や鉄道機関車など)に目標を変更して実施されました。

空母艦載機による滋賀県への空襲(昭和20年(1945年)7月24~30日)でも、第1目標となった

陸軍八日市飛行場や大津市内の航空基地（大津海軍航空隊、滋賀海軍航空隊、陸軍少年飛行兵学校）以外に、「臨機目標」として軍需工場や機関車などが攻撃されました。

守山を空襲した空母ハンコックの第6戦闘機隊（ヘルキャット4機・コルセア3機）は、大津市の航空基地に対する28日・30日正午頃の別部隊による攻撃を引き継ぐ第3次攻撃として、7月30日14時00分に紀伊半島沖から出撃しました。15時15分、大津海軍航空隊・滋賀海軍航空隊をロケット弾・爆弾・機銃掃射で攻撃し、格納庫や建物群を破壊したのち、部隊を分散させ、京都飛行場（京都府久御山町）や守山駅と駅付近の機関車、近江八幡駅付近の機関車などを攻撃しました。18時30分、部隊は航空機や人員に被害を受けることなく、全機帰還しました。

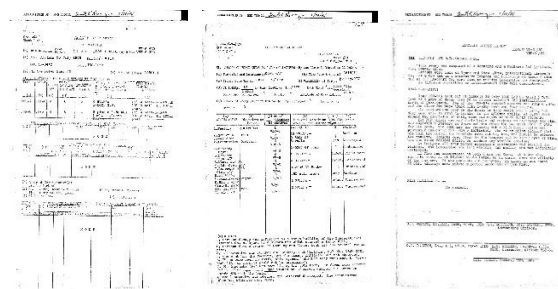


沖縄県公文書館

空母ハンコック【沖縄県公文書館所蔵写真】



米軍のコルセア戦闘機【沖縄県公文書館所蔵写真】



空母ハンコック艦載機の航空機行動報告書

『米国戦略爆撃調査団文書：海軍・海兵隊艦載機戦闘報告書』
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

7月30日 午前中～午後3時頃までの状況

その日は、滋賀県に早朝から空襲警報が鳴り響きました。

名古屋方面から攻撃目標を変更した空母ベローウット艦載機が午前6時頃から米原～八日市間の鉄道・軍需工場などを攻撃し、空母ハンコック艦載機が正午と午後3時の2度に渡って大津市の航空隊基地を執拗に攻撃しました。

空襲警報によって、国鉄東海道本線が朝から不通となったため、I子さんやNさん達は早い時間に自宅へ帰宅しました。一方、基地への攻撃を終えた戦闘機が大津を離れた直後に空襲警報が解除されたため、小島秀治郎さんら栗太農学校生は、草津駅から運転を再開した運命の列車に乗ることとなったのです。



守山町のようす（昭和31年9月10日撮影）

【守山市所蔵写真】



守山駅付近を走る蒸気機関車（昭和31年頃）

〔小島秀治郎さん提供〕



守山駅旧駅舎（昭和45年頃）〔守山市所蔵写真〕



右上：絵画「電車」

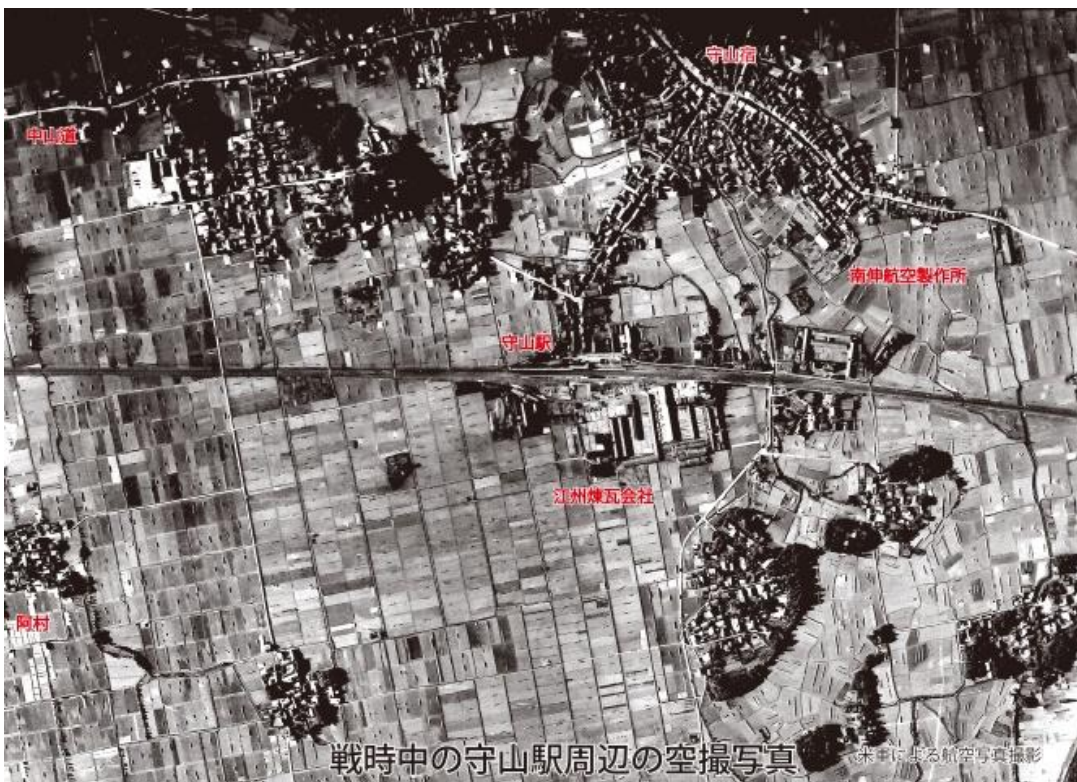
小島秀治郎さんが子どもの頃に描いた電車の絵です。

左上：子どものころの小島秀治郎さん（昭和10年1月撮影）

〔小島秀治郎さん提供〕

下：主要列車時刻表

『主要列車時刻表』の国鉄東海道本線（上り）部分をアップにしたものです。時刻表は急行などの列車だけを掲載したのですが、戦時中は、鉄道も列車の本数を大幅に減らして運行されていました。



戦時中の守山駅周辺の空撮写真

米軍による航空写真撮影

米軍による航空写真

【体験談—友達と下校中に・・・】

栗太農学校生 小島 秀治郎さん（守山市）
栗太農学校（現在の県立草津高等学校）の3年生だった小島秀治郎さんは当時は毎日、草津市の高砂製作所へ勤労働員に行っていました。

もう、忘れません。7月30日の空襲の日にはカラカラのお天気やった。暑かったな。その日は朝から学徒動員で高砂製作所へ芋作りに行ってたんですよ。3時になって栗太農学校へ帰ってきて、スキ、クワを学校に置いて、そのまま草津駅へ。勉強なしですからね。夏休みも勿論ないですからね。

帰りがたまたま一緒になった同学年の徳谷君と1年生の深尾君と列車に乗ったんです。徳谷君は学級が違いましたが、年が一緒だからよくしゃべっていたんです。

列車に乗ったのがだいたい3時半ぐらいでした。10～12両の汽車だったと思うんですけど、前の方は浜松と敦賀へ行く兵隊さんで満員やった。私たちは兵隊さんとこに乗せてもらたんや。

兵隊さんは「おい、お前ら国のために何してるんや。」「いや私は、8月20日に鳥取の美保航空隊に入ります。」「よおし。それやったら乗れ、乗せたる。がんばれよ。」といわはったのが1両目と2両目のつなぎ目、デッキの上なんですよ。私がそう言ったから、徳谷君と深尾君と私の3人が乗った。それでも兵隊さんが一杯でデッキの中に入れへん。草津～守山間の7分間、3人がステップの所でぶら下がってました。一緒に乗せてもらった2人がここで死んだ。私だけが降りて助かったんや。

草津から乗った時には、もう飛行機はぐるぐる廻ってたんやからね。それで「どこの飛行機やろな」ってたんやから。そのまま帰るかなと思ったら、汽車に引っ付いて来てた。

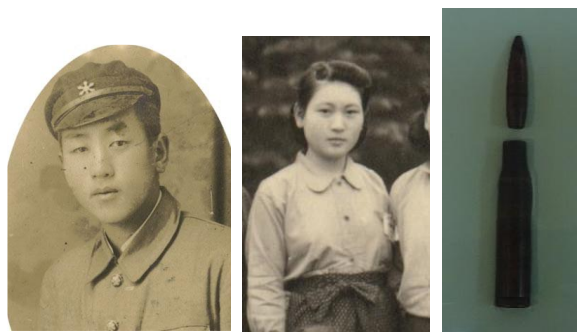
私だけが守山駅で降りたんです。上り列車の右側に乗ってたし、デッキの中通れへんから、駅のホームに降りられへん。私は線路の方へ下りた。それで下りのホームから地下道通って守山駅の上りのホームに出てきてん。駅を出て、20mほど歩いたかな。そこで空襲…。その時、列車は出発してました。



滋賀県立栗太農学校校舎【小島秀治郎さん提供】



昭和21年栗太農学校卒業記念写真【小島秀治郎さん提供】



左：栗太農学校2年生の小島秀治郎さん

【小島秀治郎さん提供】

中央：集合写真から竹村芳子さん部分を拡大

【竹村芳子さん提供】

右：守山空襲に使用された機銃弾・薬莢【Nさん提供】

機銃弾・薬莢は、守山空襲で実際に米軍の艦載機から発射されたものです。空襲を体験されたNさんが戦後、ご自宅裏の畑で拾われました。守山空襲では、艦載機から大量の機銃弾が人々に向けて発射されましたが、これらの資料は確認されているなかで、現存する唯一の銃弾・薬莢です。守山空襲の記憶を後世に伝える貴重な物的証拠といえます。

【体験談—田んぼの草取り中に】

守山駅周辺の住民 竹村 芳子さん（守山市）
石山の東洋レーヨン石山工場へ女子挺身隊で働き
に行かれていた竹村芳子さんは当日、農作業の手伝
いのため、ご自宅へ戻っていました。

里が田んぼやってたから、農繁期は手伝わんなら
んし、レーヨンに行っていなかったんです。その時（7
月24日）に、レーヨンが爆撃されたんです。行って
なんでよかった思けど。レーヨンで2・3人亡くな
らはったし。その後、守山駅で汽車が襲撃されてね。

私が父と田んぼの草取りをしてたら、空襲警報が
どんどん鳴ってくるし、父に「帰ろか、怖いし。」い
うてたんです。大津の皇子が丘（大津海軍航空隊）
の方で旋回している飛行機が見えて、ああ、空襲受
けてはるな思ってたら、編隊組んで、だんだんだん
だん守山の方へ向いてやってきたんです。「めったな
ことでは空襲で、守山ではないやろけど、機銃掃射
されるとかなんさかいし、帰ろか」て、言って田ん
ぼやめて（農作業を中止して）帰りかけてたら、守
山駅に電車が着いたのが見えました。



女子挺身隊（東洋レーヨン石山工場 後列右から5人目が竹
村芳子さん）【竹村芳子さん提供】

【体験談—工場へ出勤できずに】

守山駅周辺の住民 Nさん（守山市）
当時、瀬田工業学校（現在の県立瀬田工業高等学校）
の2年生だったNさんは東洋レーヨン石山工場へ勤
労働員で働きに行かれていました。

私はね、その時分は、旧制瀬田工業学校の中学2
年生でした。学徒動員で瀬田工から東洋レーヨンへ
学徒動員へ行っていました。

学徒動員の行きしなに（通勤で）石山（駅）でい
つも降りたんやけど、その日の朝は石山まで着けな
んだ。空襲の飛行機が来たもんで、（列車が不通とな
って）行けなんだから、草津駅から石山まで歩いた
んです。どうしても石山まで着けなんだ（たどり着
けなかった）から、ちょうど狼川の辺で（引き返し
て）、昼過ぎに友達と一緒に家へ歩いて帰って来まし
た。

家から50mくらいかな、田があって、そこで母親
と近所のおばあさんとが仕事をしていた。それを見
に行ったり、そいつと一緒に遊んでいたんや。

空襲時の状況

守山空襲についての日本側の公的な記録は残され
ていません。体験者の証言には、空襲時刻や戦闘機
の数に一部、食い違う点もあります。証言や当時の
記録から空襲時の状況を推測すると、概ね午後3時
30分～4時頃（Uさんの祖父の日記では5時半）、大
津の航空隊基地を攻撃した4機の戦闘機（重野重彦
さんの証言では7機）が、沼津行きの列車が守山駅
の上りホームを出発した直後、駅南側のレンガ工場
の煙突を巻くように急降下しながら機関車や前方の
客車を目掛けて機銃掃射を開始しました。戦闘機が
3反復しながら執拗に機銃掃射を繰り返し、その攻
撃は駅北東の軍需工場（南伸航空機製作所）にも及
びました。吉身六丁目の墓地にある六地藏は工場へ
の攻撃に伴って被弾したと考えられます。

空襲直後の状況

戦闘機が飛び去った後も守山駅周辺は騒然とした
状況が続きました。駅の近くにあった農作業小屋の
ワラ屋根が機銃掃射を受けて燃え上がったのです。
住民たちは日頃の防空訓練の経験を活かし、バケツ
でなんとか延焼を食い止めました。焼夷弾や爆弾が
使用されなかったことや火災が1ヶ所に留まったこ
とが幸いしました。

空襲で22人以上の方が負傷しました。負傷者の
多くは町内の太田病院や西籐病院、岸本医院に運ば
れ、治療を受けました。一部の負傷者は住民の手に
よって、草津や野洲の病院まで運ばれました。

米軍機から見た守山の町

米軍機のパイロットが見た守山の町が大きく変貌を遂げる前（昭和30年頃）の航空写真です。



昭和30年頃の守山駅東側の様子（空撮）

米軍機の機銃掃射によって、列車は貨物列車（写真中央）の位置付近で停車しました。写真手前にレンガ工場、線路奥側に缶詰工場が写っています。〔守山市所蔵写真〕



平成25年の駅前の様子

線路北側中央にある瓦屋根の平屋が機銃掃射を受けた旧山成家住宅です。〔当館撮影〕

【体験談—空襲のすごい音】

栗太農学校生 小島 秀治郎さん（守山市）
小島秀治郎さんは乗車中の徳谷さんや深尾さんと別れて、守山駅で降りました。

守山駅を出て 20mほど行った駅前の自転車預かりのところで、バリバリとすごい音がしたんや。米軍機の音は、「グアーン」というような音やけど。エンジンが掛かってる上に、機関銃の音やからね、すごい音ですわ。ほんまにね、「バリバリバリー」っちゃう、すごい音ですわ。

私は、店の前で小さくなって電柱に隠れた。なーんの役にも立ったーらへんけどな。恐怖で体がカチカチになって。動けへん。ほんでに、「空襲のときはそうゆう風にして避難せい」と、という訓練を受けてましたから、耳にフタして、それから目にもフタ

して。4機がダダダーっと一通り行くまでそうしてた。米軍機は4機の3反復ですわ。延べ12機で攻撃したんです。

2回目に飛行機が飛来した時、振り向いたらパイロットが見てるんです。ニカッと笑って。で、ヘルメットだけ後ろ向けてな、パイロット乗とったわ。笑ろてるの見たわ。それはもう低いとこ飛んでた。どうやら。今の電柱からちょっと高いぐらいとこらまで急降下して来とったんと違うか。そうでなくても音が大きいのに、それで機関砲でバリバリバリってやるんやからな。それはもう、雷がいっぺんにガンと落ちた音だったわ。

それで静まったから走って家に帰った。駅周辺を撃っとーる（攻撃している）ことがわかってたから。飛行機が3回目に飛来した時には、家の軒下から望遠鏡で見てました。「ああ、また来よったわ」って。駅から100～150mもあるなしだからな。飛行機が望遠鏡の中へ入ると、さっと隠れてたけどな。怖かったけど、8月20日から予科練へ入るつもりやったから、度胸も付けんなんらんとおもうてました。



守山駅前通り（駅舎側より撮影 昭和31年9月10日） 現在の様子（セルバ東側の通り）

小島秀治郎さんが空襲に遭遇した駅前通り

小島秀治郎さんが米軍機の轟音に驚き、隠れた駅前の自転車預かり所の前の電柱は左側写真の赤丸の電柱です〔守山市所蔵写真に加筆〕。右写真は同じ場所の現在の様子です〔当館撮影〕。

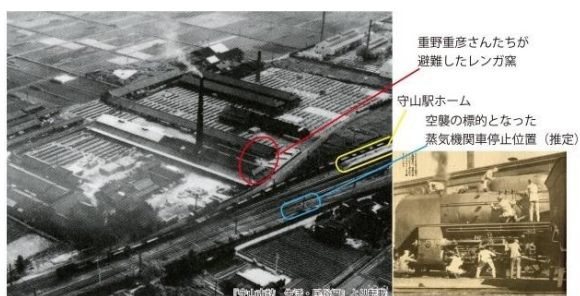
【体験談—レンガ窯へ避難】

栗太農学校生 重野 重彦さん（近江八幡市）
栗太農学校から伴作兵衛さんと一緒に帰宅中でした。

列車が止まった途端、何か「逃げよっ」という声があったんです。それで皆、南側と北側にパーッと

分かれて逃げたんや。わしは南へ逃げました。南側にレンガ工場の大きい窯が並んで、レンガを焼いてはらへなだから、中が空いてましたんや。わしらはその中に逃げました。そしたら（窯の）前ががら空きやったから、列車の方がよう見えたんです。機関車から30mもなかったな。機関砲の弾が「パンパパンパッ」と機関車に当たると、鉄と鉄とで、「ダーン」。それが跳ね返るのが見えとった。窯の中には20～30人はいたと思う。そして、「まあ、ここは爆弾落としようへんだ。大丈夫や」いうことは聞こえとったな。

艦載機は7機編隊。はじめの3機が襲撃しよったんや。3機が撃って、その後ろに4機もついてくる。そして、しばらく時間があるんですね。また同じように3機と4機で繰り返して。それが3遍ありましたわ。まあ、半時間ぐらいは窯の中にいたかなあ。



左：駅南側にあった煉瓦工場

『守山市誌 生活・民俗編』から転載

右：蒸気機関車の側面

『写真週報』第294号（昭和18年10月20日発行）から転載

重野重彦さんが避難したレンガ工場

使われていないレンガ窯に逃げ込んだ重野重彦さんたちは、線路に停車した蒸気機関車が戦闘機から激しく機銃掃射される様子を見ていました。

【体験談—避難したホームの地下道】

栗太農学校生 伴 作兵衛さん（近江八幡市）
伴作兵衛さんが栗太農学校から同級生の重野重彦さん達と帰宅中の出来事でした。

草津駅でも「危ない。敵機来襲や」と、汽車は草津駅で止まって、すぐには発車せなんだ。そして、敵機がどっか行っただけで発車したと思います。多分、3時から4時頃くらいに守山へ着いた途端に敵機来襲。「列車やられる」ということで退避したんや。レ

ンガ工場へ逃げはった人もたくさんいましたが、私は近かったホームの地下道へほかの人達と避難しましたんや。

音が「ガーッ」と「ワッ」と来て、もう接近するのが分かる。音が変わってきよるで。機銃掃射の音も「パシパシパッ」て。それで「ワッ」て、また上がる。離れるときの音も違うんや。それ1回だけじゃなくて何回も。

地下道のところどころに網を張った明かり取りの穴がありましたんや。上からその穴へね。弾が落ちよる。皆それを逃げて。もう、皆が寄って抱き合せて、ぎっしりやったな。



守山駅下りホーム（昭和45年撮影）

〔守山市所蔵写真〕

伴作兵衛さんが避難したホームの地下道

伴作兵衛さんは、空襲時にホームと改札をつなぐ地下道へ避難しました。写真左端に地下道への階段が写っています。

【体験談—突然、強烈な音が降ってきた】

守山駅周辺の住民 竹村 芳子さん（守山市）
うさん（近江八幡市）

米軍機を見た竹村芳子さんたちは農作業を中断し、急いで帰路につきました。

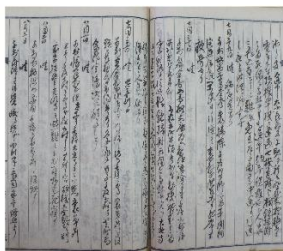
守山駅に電車が着いたかと思たら「パンパンパンパン」て音がしました。飛行機が急降下して来て、機銃掃射したんです。それで怖いし、走って1番近くの大西さんというお家の縁の下へ潜り込んだんです。（竹村芳子さん）

当時、国民学校に通っていたうさんは、中山道沿いの自宅から駅近くの牛乳屋さんに配給の牛乳を受取りに行きました。

その日、牛乳の配給をもらうために、守山駅の近くにある牧場で並んでいたんです。並んでいるうち

に駅に汽車が着いて、「兵隊さんがたくさん乗っている」というので、駅へ走って見に行ったんです。ちょうど、駅の改札で、身を乗り出した瞬間、機銃掃射がはじまったんです。突然強烈な音が降ってくるような気がしました。駅前の煉瓦会社の煙突の方からグラマンがくると回って来た瞬間に猛烈な音がしました。音が「バリバリ」だったのか、「ドッカーン」だったのかは覚えていませんが、とにかくトタン板に大きなものを大量にぶつけたような音だったような気がします。(Uさん)

Uさんの祖父が記した守山空襲



Uさんの祖父の日誌 (Uさん提供)

当日の夜に空襲犠牲者の法要が、町の警防団によって大光寺で営まれたことがわかります。不思議なことに空襲の時間が午後5時30分と他の証言と大きく食い違っております。

七月二十日 晴
(前略)
午後五時半頃より列車が駅頭に到着し、機銃掃射死傷者多数ありたり大光寺にて遺家族集合せらん
警防団が法要をなしたり○○一人を極む
敵機の○鬼○振りを発揮す留むべき人道の積(おおい)あり

Uさんが配給のため並んだ牛乳屋さん



牛乳屋さん付近の現在の様子

駅前通りにあった牛乳屋さん和牧場

Uさんは、牛乳の配給をもらうため、店の前に並んでました。駅に着いた列車の兵隊を見るため、駅の改札口へ向かった時、空襲に遭遇しました。左の絵は昭和30年頃の守山駅前の様子です。

左図は『守山市誌 生活・民俗編』掲載図に加筆して作成
右写真は当館撮影

【体験談—家の裏を戦闘機が】

守山駅周辺の住民 T子さん(守山市)
小津国民学校教員のT子さんは、久しぶりの休日の午後、自宅で6日前の爆音(大津市石山へ落とされた模擬原爆)を越える轟音を耳にしました。

その日は朝からよく晴れた日でした。たまたま学校へも出ず、勤労奉仕もなく、珍しく母と一緒に家にいたんやけど、夕方になって、空襲警報のサイ

レンが鳴りましたんや。そんな時は「また、警報やな」くらいに思ったんやけど、ひょいと家の裏に出てみると、飛行機の爆音がいつもと違って、ずっと低い位置から聞こえましたんや。「お母さん、この音おかしいで。いつもと違うよ」と言って間なしに、アメリカの戦闘機が超低空で飛んできましたんや。裏手の稲田がザワザワと波を打って揺れ、飛行機のマークや操縦席のアメリカ兵の顔までハッキリ見えたんです。あまりの恐ろしさで、お母さんと近くにあった柿の木の下にへばりつきました。飛行機が機銃掃射を加えながら向こうに飛んでいったんで、非常袋を取りに家の中へ戻ったんです。そしたら、また飛行機が戻ってきて、「バリバリ」と機銃掃射の音をたてたので今度は急いで床下にもぐり込みましたんや。

【体験談—防空壕への避難】

守山駅周辺の住民

Nさん(守山市)・I子さん(守山市)

列車が不通となり、勤労働員に行けなかったNさんは、家に帰って友達と遊んでいました。

裏の畑に近所の山中さんとN家の防空壕があったんや。材木屋さんから木材を買って、植木屋のおじさんに手伝ってもらって畑を掘って、防空壕作つたんですわ。ちょうど3~4人ぐらい入れるような大きさに、下にみざら(スノコ)を敷いて、上はどのように土が落ちんようにしてたかは覚えてないけど。夜でも空襲警報があつたら、入って寝られるような防空壕を作ってたんです。

あんまり時間を覚えて無いけど、夕暮れ近くやった。たまたま、その時は家の中にいたと思います。

「バリバリバリ」と音がしたからもうあかんと思て、防空壕へ飛び込んだんや。(Nさん)

大津高等女学校生(現在の県立大津高等学校生)だったI子さん(Nさんの姉)はその日、試験勉強のため登校しました。学校が空襲警報のため午前中で休校となり、仕方なく膳所から守山の自宅まで歩いて帰った彼女は、疲れて昼寝をしていました。

私は空襲警報が鳴ったのを知らんと寝てました。そしたら「空襲やー」いうて弟が揺り起こしてくれたんです。それで、びっくりして家の防空壕に行ったら、入れしません。汽車から避難してきた大阪方

面の人たちが家の防空壕に入ってしまったんや。「困るわ、うちの防空壕やのに。退いて頂戴。退いて頂戴」ていったら、入っていた人が「田舎のこんな小さな防空壕やったら、いっぺんにやられてしまう。みんな逃げて行こう」て、行きはったんで、やっと家の防空壕に入れました。

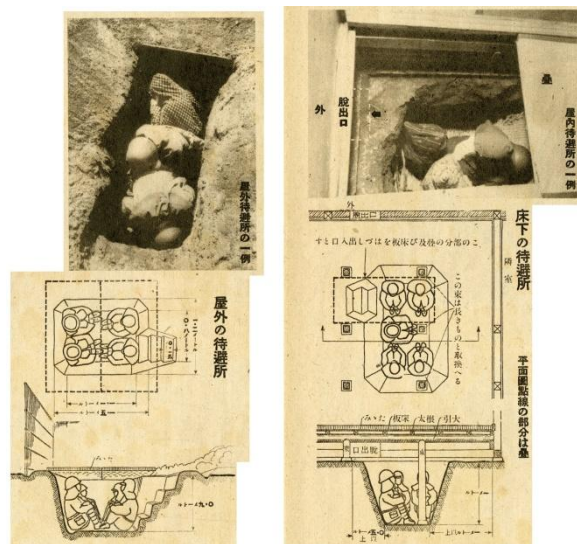
うちの裏にはね、広い畑があって、父が趣味でブドウ畑やらナシやらリンゴやらの果樹園を植えといたんです。そこを白いカッターシャツを着た人がだあーと逃げていかはったんです。その人をめがけて「バアバアバアバアバー」と機銃掃射する音を聞きました。

(I子さん)



宝善寺の裏庭の防空壕跡〔当館撮影〕

手前の植え込みの中に防空壕がありました。



防空壕のようす

『写真週報』第294号(昭和18年10月20日発行)に載っている防空壕です。当時の防空壕は、家の床下や庭先に数人が入れる程度の穴を掘って、板などで天井を造った簡易なものがほとんどだったようです。

【体験談—安全なはずの守山で】

疎開児童のお世話をされた方々

山口 とし子さん(守山市)

S子さん(守山市)



豊川工廠時代の山口とし子さん(山口とし子さん提供)

疎開児童たちと守山の宝善寺へ移り住んだ山口とし子さんは子供たちと平穏に暮らしていました。

その時分は、宝善寺から守山駅が見えたんです。あたりを「空襲警報、空襲警報」て、いって廻ってはって。「もう、この上を旋回してる。」って、みんなの声がいつもと違うわけや。それで、子供たちに「防空壕入れ。入れ」いってね。防空壕は、庭の横に子供たち用の長い防空壕を造ってもろてたんです。子供たちを防空壕に入れたけど、私は入れませんでした。前の家に病気のおばあさんが1人で住んではって、「もしかの時は私も入れてや」ていってはったんです。それで、おばあさんを入れてたら、私が(防空壕に)入れへんようになりました。

飛行機が目に見えるわけや。そして、「ピュッ、ピュッ」と機銃掃射や。駅へ機銃撃って、その後、飛行機が廻ってこっちへ来るように思えるねん。「うわあ!」と思てね。そら「怖い!怖い!」いってた。頭も(防空壕に)入ってへんから、「うわあ!」と思てたけど、目開いて見てたんや。

そんなもん生きた心地なかったわ。守山駅はすぐそばやし、あの時は肝をつぶしたな。まあ、それから警報が解除になって、子どもも無事やったけど。

(山口とし子さん)

永願寺で疎開児童たちを預かっていたS子さんは、子供たちに食べさせる豆をもらいに檀家さんの畑へ向かいました。

豆さんを貰いに行った時のこと思い出すと、「怖かったな〜」て。その時は、門徒の人が「豆さんがようけ生ってるから採りに来い」て、いわはってね。

「好きなだけ採ってもええ」て、いってくれはった

んですわ。それで、踏切の向こうの畑まで豆さん貰いに行っていましたんや。そしたら、守山駅の方にB29 がぼんぼん来ましてね。もう、豆の木の陰に隠れてました。あの時は、機銃掃射っていうんですか。

「バンバンバンバン」って、ものすごい音がしてましたで。私は豆の木の中に隠れてましたわ。

しばらくして音がせんようになったから、急いで帰りました。あの時分は食べることに一生懸命やったけど、豆さんもちょっとしか貰わんと、走って帰りました。けど、誰も出会いませんでしたわ。もう、怖かったでっせ。

(S子さん)

【体験談—空襲後の列車の様子】

栗太農学校生 小島 秀治郎さん（守山市）
自宅へ戻って空襲の様子を眺めていた小島秀治郎さんは、戦闘機が飛び去ったことを確認した後、守山駅へ向かいました。

空襲後、もういっぺん、列車の方に見に行ったら、機関車の先頭が信号所を越えて止まってました。機関車は水がダダーと零れているし、蒸気は噴いとった。機関助手が撃たれて、機関士もポカンと線路のところで座ってた。

汽車が動かへんからね、兵隊さんいやはったですよ。介抱してはるのも見たんや。兵隊の事（兵士の死傷者数）は一切公表になってないので知りませんが、兵隊さんもようけ…じっとしてはったわ…。



守山駅東側の信号機を通過する電車【当館撮影】

【体験談—自宅で見た惨状】

守山駅周辺の住民

Nさん（守山市）・I子さん（守山市）
避難していた防空壕から出てご自宅に戻ったI子さん・Nさん姉弟は家の中の様子に愕然としました。

防空壕から出てきたら、僕の友達に防空壕あるの知らんから、うちの家のおくどさん（カマド）の中へ潜っとな。そして、座敷には怪我した兵隊さんがいてはって、畳がもう血の海でした。後日、畳の上敷きは母親が近くの川へ持って洗いましたんや。その時分は物不足でしたから干して、またそれを使いました。

それで、いつまた起こる（空襲される）とかなんさかい、布団やらを防空壕に入れる準備をしようと押入れ明けたら、全然知らんよそのおばあさんが防空壕代わりにうちの座敷の押入れの中に入ってた。

(Nさん)

その人（押入れの中にいたおばあさん）は越中の妹のどこへ行こうと思てはったんや。年いったおばあさんで気の毒やったから家で泊めてあげましてね。翌日になってから乗れる電車で帰らりました。

防空壕から出てきたら、青白い顔をして軍刀下げた指揮官みたいな軍人さんがいたんです。「私にかまわんと民間の人のお世話をしてあげてください。」ていつてはった。怪我した人を近くの太田病院と西藤さん、ほして内科の岸本さんへ皆が運んで行っていました。兵隊さんやなしに民間人が多かったです。

うちのカマドの前の腰掛にいた若い姉弟のお姉ちゃんは、夏服、背中の背骨がすーと裂けて、私何気なしにふっとみたら、背筋、胸が出てるんです。「わあー」ていいましたら、弟さんが、「姉ちゃん知らんてるさかいに、言わんといてやって下さい」て、背中の骨がむき出しになってるんですわ。機銃掃射にやられて。その人は間もなく亡くなられたそうです。目の前でそういう負傷者の姿を見てますんや。

夏でしたのでうちの母がね、敷布を洗っといたんです。その敷布を引き裂いてね、皆さんが包帯代わりに使って、お布団の綿を脱脂綿代わりにしてね、手当てしてました。ほんとに地獄そのもののような姿を目の前に見ましたわ。

(I子さん)



負傷者が運ばれた守山の病院

左上：在りし日の太田病院（『守山市誌 生活・民俗編』から転載）、右上：西藤小児科〔当館撮影〕、左下：岸本眼科医院〔当館撮影〕、右下：負傷者が運ばれた駅前通り（昭和31年撮影、守山市所蔵写真）



防火用水専用バケツ

【体験談—終わらない危機】

守山駅周辺の住民

竹村 芳子さん（守山市）・Uさん（守山市）
戦闘機が去って、ホッと一息ついた竹村芳子さんたちは、町の危機がまだ過ぎ去っていないことに気がつきました。

「怖い、怖い」といってたら、父の弟の家が線路の西側にあったんですけど、そこの小屋が燃えていました。鉄道線路をワーッとまたいで「早く消さなくちゃ」ということで、みんな手に手にバケツ持って、在所の人、何十人が消火に行ったんです。バケツで消えるような何や（火）ないと思うねやけど、みんな、手に手にバケツ持ってね。みんなで消しました。小屋の屋根はワラでしたから、みんなで必死になって消しました。田んぼのそばに水があります

やろそれを使って。まあ、本屋まで移らんかったからよかったけど。（竹村芳子さん）

駅の改札口で空襲に遭遇したUさんは空襲後、急いで家に戻りました。

牛乳を貰うことも忘れて家に帰ったら、家の周りに縄が張られてて、中に入れませんでした。というのも、家の隣が病院で、その病院に負傷した人が運ばれて来てたんです。病院に入りきれないので、うちの庭にもゴロゴロおられたんです。苦しみ悲鳴なんかも聞こえました。

後から聞いた話では、手術する道具がなかったんで、弾が貫通した足を切断するのに鋸をつかったそうです。筵を被せた遺体もありました。（Uさん）

【体験談—犠牲になった人たち】

栗太農学校生 小島 秀治郎さん（守山市）
空襲後、一緒に列車に乗っていた栗太農学校生の徳谷さんと深尾さんのことが気になった小島秀治郎さんは母親に病院の様子を見に行ってもらいました。

私は未成年やったから病院へ見に行かれへんかったんや。母が国防婦人会の役員してたんで「一緒に乗っていた深尾君や徳谷君、学生服に名札付いてるさかいに、病院みて来て」て、太田病院へ確認に行ってもらったんです。

病院から帰ってきた母親は「酷い事やわ。親戚の高橋寿美子ちゃんが撃たれた。八幡病院に行かなあかん。それで、秀よ、農学校の人、二人とも名札見た。死んでらったわ。行かんとかい。もう見たらあかん。顔あらへんかったわ。」て、言ったんです。私はもう震えて来た。「ええ、顔あらへんか」「うん。名札、血ついたった」

二人（徳谷さん・深尾さん）は篠原駅と近江八幡駅で降りる予定やったんや。ほんでそのまま乗ってて、デッキにぶら下がってたからまともに機銃掃射を受けたのやろな。聞いた時は、ほんま単純に怖いなと思ったけど、後になって「戦争って何のためにしているんだろうな」と思った。

親戚の女の子（高橋寿美子さん）は、煉瓦会社の社宅でおばあさんに抱っこされてた時に、機関銃の弾がおばあさんの耳をかすめて、頭に被弾したんや。

守山のお医者さんでは取り出されへんから八幡のヴォーリス病院まで行ったんや。でも、8月11日に亡くなりはった。煉瓦会社で働いていた朝鮮の人も背中撃たれて怪我してはる。

兵隊さんで死んだ人はわからんのです。一切公表になってないから。でも、私は兵隊さんが川の底にうつぶせになって死んではるのを見てるんや。川に末期の水飲みに来て、そのままや。死んで川に血流して、黒なってる血が固まってた。お地藏さんの所も死んではった。どぼんと座ったまんま、撃たれて亡くなってはった。列車目がけて撃つとるんで、列車の中に居たら危ないさかい、みな逃げるわ。栄久楼（という店）の押入れの中でゲートル巻いた兵隊さんがそのまま死んではった。

私が（負傷者が運ばれた病院に聞いて）調べた数は、死者が11人、重軽傷が22人でした。病院は太田病院と西藤さん、岸本さん、野洲の稲端さん、草津の井上病院まで聞きに行った。うちの兄貴らが負傷者を兵隊さんと一緒にリヤカーで草津や野洲の病院へ送りよったもん。

いまだに不明のままの犠牲者

空襲では列車の一般乗客や兵士とともに守山の住民も犠牲になりました。小島秀治郎さんが当時行った聞き取りによって、空襲で少なくとも11人の方が亡くなられたことが判明していますが、犠牲者の総数は現在も不明のままです。その理由は、人々に空襲の情報が漏れるのを恐れた軍が駅前に憲兵を配置するとともに、部隊の死傷者数を隠したからです。空襲を受けた部隊は死傷者を守山に残したまま、復旧した列車に乗って立ち去りました。その後、終戦による部隊の解散などもあり、軍として死亡した兵士の遺体引き取りはなかったようです。

現在、当館が確認した犠牲者のうち、お名前が判明している方は、小島秀治郎さんが証言された栗太農学校の深尾清和さん・徳谷泰弘さん、高橋寿美子さんの3名だけです。水路や栄久楼で死亡していた3人の兵士やI子さんの証言にあったN家で応急治療を受けたのち亡くなった女性はお名前が不明なままです。

山口とし子さんは「当時、身元不明者6人の遺体

が阿村・伊勢の共同墓地に仮埋葬された」と話されています。軍による情報隠蔽のなか、犠牲者の多くが満足な調査・確認も許されずに、身元不明者として埋葬されました。

【体験談—守山の空襲で亡くなった兄】

深尾 清和さん（栗太農学校生）の妹N子さん
栗太農学校生だった深尾清和さんは、小島秀治郎さんといっしょに学校から帰宅する途中、守山で空襲に遭遇し、亡くなられました。

当日の朝、空襲警報がありました。母親は「こんな日やで学校行くのやめとけ」と、言ったんやけど、友達が「清和、行こう」と、誘いに來たんです。それで兄は「ほんなら、まあ行ってくるわ」と、学校へ行きましたんや。

私は軍馬のマグサ（食糧）にするマコモを刈りに近江八幡駅のそばの大きな溜池に子供会で（勤労奉仕で）行ってたんです。夕暮れ近くに、西の空からグラマン機が來たんです。会長さんが「伏せよーっ」って、いわはったから伏せたんやけど、飛行機の様子を見てたんですわ。すーっごい低空で。近江八幡駅でウワーッと、火の粉が飛んだんです。で、しばらく旋回して、ほしてまた安土のほうへ行っただす。

両親は近江八幡駅の側で作業していることを知ってましたで、「ほらもう絶対、N子が撃たれてるわ」と思ってたそうです。私が家に帰るのと前後して、「今の深尾清和君が撃たれはったから、迎えに来てください」と役場から知らせに來たんです。

戦時中やから何もありませんで、父親が親戚の何人かと一緒に、八幡から守山までリヤカーで迎えに行きました。まだ（生きている兄を）寝させるような気持ちだったんでしょうね。リヤカーに布団や毛布とか乗せて行きました。そして、次の日のお日さんが上がった時分に「ガラガラー」って、リヤカーの音がして、兄が四角い木箱の座棺に入って帰って來ました。

「守山駅には、もうズーッと戸板へ並んだった。汽車に乗り合わせはったお坊さんが、簡単やけど、枕念仏唱えて、供養してくれはったわ。ずっと拝んで回ってくれはったぞ」って、父親はいうてました。

父親がお棺開けて、みんなで拝みました。「身体は心臓に1発、貫通銃創。そして背中3発、穴が開いてた」そうです。即死やと思います。幼い弟が「兄ちゃんねんね、兄ちゃんねんね」といいながら眺めていました。

もう一人の犠牲者の徳谷さんは「顔がバーツと離れて全部なくなってた。顔が見られなかった」そうです。父は「うちはまだ顔が拝めるだけ幸せやな」と、泣きながら自分を慰めていました。



近江八幡の空襲に使用された機銃弾

空母ハンコック第6戦闘機隊は、大津市の航空基地を攻撃後、部隊を分散させました。守山を空襲した部隊とは別の2機は、近江八幡駅付近を走行中の列車を空襲しました。線路近くで農作業をされていた北川庄治さんのお母さん（北川千枝さん）は空襲に遭遇し、機銃弾を受けて亡くなりました。

〔北川庄治さん提供〕

【体験談—機銃掃射を受けた自宅の惨状】

守山駅周辺の住民 Y子さん（守山市）
Yさんは当時、軍用布の染色などを扱っていた竹仁染化工場の事務員でした。

工場では、こんにやくを和紙に塗って乾かした風船爆弾の材料も軍部に納めていました。

その日、空襲警報で防空壕に入っていたら、守山駅の方で煙が上がったんや。「あんたの家の方と違うか」と言われ、急いで帰ってみると、近くの小屋がくすぶってたんです。

ほっとして、家に入ったんやけど、線路に近い我が家の中は、そら一大変な有り様やった。壁土が落ち、瓦や硝子の破片が部屋の中のあちこち散らばっていましたわ。機銃弾で天井に穴が空き、畳にも穴

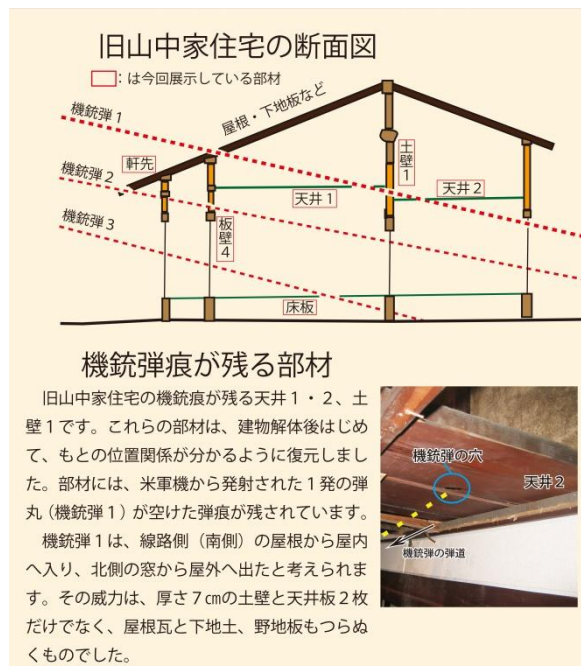
が空いてた。部屋の柱や障子の棧に、小指くらいの銃弾が突き刺さっていましたよ。幸いなことに、母は田んぼの手伝いに出ていたので無事でした。近くの防空壕に避難してましたんや。

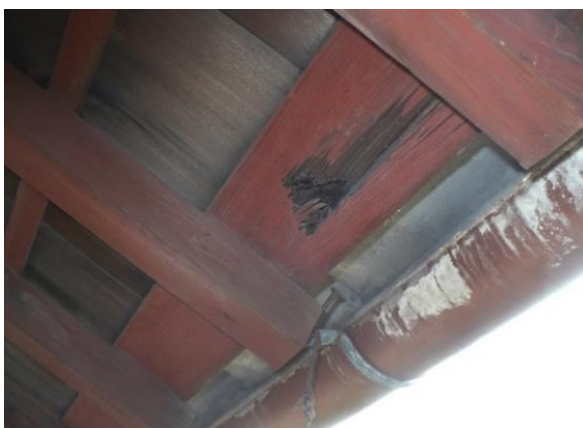
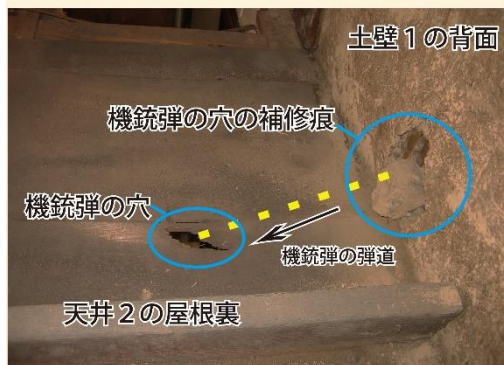
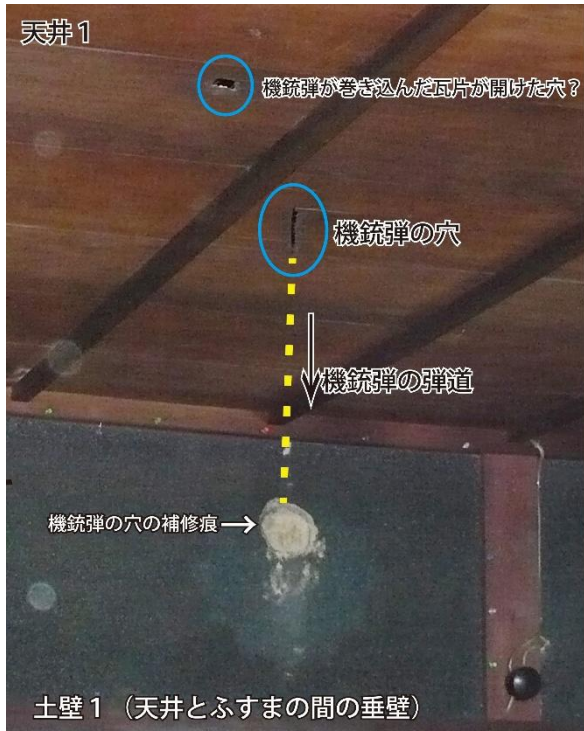
家の前には駅の構内を少し出た列車が停まってましたわ。



解体前の旧山中家住宅（Y子さんの自宅）〔当館撮影〕

線路に隣接していた住宅に列車を狙った機銃弾が多数撃ち込まれました。





軒を貫通した機銃弾の弾痕 [当館撮影]

旧山中家住宅の機銃掃射を受けた部材 [Mさん提供]

旧山中家住宅は守山駅北東側にあった平屋の住宅でした。細い路地を隔てて線路に面していたため、守山空襲では家の前に止まった列車を攻撃する戦闘機の機銃掃射によって、建物が大きく破損しました。

建物は平成25年(2013年)に解体されましたが、解体時の当館の調査によって、空襲で受けた機銃弾痕が天井板や土壁、板壁、縁側の軒先、床板に多数、残っていることが確認されました。所有者のMさんのご厚意により、弾痕が残る部材の一部を寄贈いただき、今回展示することとなりました。



機銃掃射を受けた天井 (天井1)



機銃掃射を受けた天井 (天井2)



機銃掃射を受けた部屋の土壁 (垂壁1)



機銃掃射を受けた部屋の土壁（垂壁2・垂壁3）



機銃掃射を受けた縁側の軒先、板壁（垂壁4）



座敷の床板（機銃弾が床板を貫通しました）



座敷の畳の下で発見された床板の機銃弾痕【当館撮影】



犠牲者の血が流れたホテルの川（丹堂川）【当館撮影】

駅前の小川（丹堂川）で機銃弾を受けた兵士が座ったまま亡くなっていたそうです。



当日の夜、空襲犠牲者の法要が営まれた大光寺【当館撮影】

【体験談—列車に乗り合わせたお坊さん】

Hさん（守山市）

当時、常念寺の住職だったHさんの父親は、空襲を受けた列車に乗り合わせていました。深尾さんら空襲の犠牲者を守山駅で供養をされたお坊さんはこの人だったかもしれません。

うちの父親はね、常念寺の住職で、教職も兼ねてました。「兵隊に行くのいややで、徴兵の検査でわざと悪くしたんや」て、冗談でいってましたけど、徴兵されて予備兵みたいもんですね。ほとんど毎日、訓練があったんですね。鉄かぶと被って、ゲートル巻いてね、「何でこんなもんやらんならんねえ」とか、ぶつぶつ言いながら行っていましたね。

昭和20年（1945年）頃、うちの親父は東本願寺に勤めてました。京都駅で降ろされた戦死者のお骨を本願寺で法要していたそうです。なかには「ころころ音がして何か分からんのもある」て、いってました。そして、守山駅が襲撃された時、父親が汽車

に乗ってまして、「降りると共にダァダァダァーという機関銃の音がして、どっかの家に飛び込んだ」そうです。

愛国心はあんまりなかったように思いますわ。終戦だといふ前から、「こんな戦争あかん、負ける」て、いってましたし、玉音放送の時には、「ほやろ、負けたやろ、わしのいうたとおりや」いうてました。



鉄かぶと



守山空襲で犠牲になった身元不明者の埋葬地（阿村・伊勢共同墓地）〔当館撮影〕

身元不明者 6 人のご遺体は阿村・伊勢共同墓地に運ばれたのち、入口付近の 3 本の杉の根元（コンクリート塀・鉄扉の内側付近）に仮埋葬されました。戦後、身寄りの方へ引き取られたご遺体もあったとのことですが、人知れず、今もなお眠っている方がいるかもしれません。



機銃掃射を受けて傷ついた六地藏（守山市吉身 6 丁目）
〔当館撮影〕

墓地の入口に立つ六地藏は守山空襲で、米軍機の機銃掃射を受けて、光背や顔面の一部が欠けてしまいました。現在、戦争の記憶が薄れゆく中で、守山に空襲があったことを後世に伝える貴重な証人（戦争遺跡）といえます。

守山空襲から 75 年が過ぎて

守山空襲では多くの方々が亡くなりました。犠牲者の遺体は当日夜、たまたま列車に乗り合わせていたお坊さん（常念寺の住職？）が駅で供養したのち、町内の大光寺へ運ばれ、守山町の警防団が主催する合同葬儀が営まれました。身元が判明した深尾清和さんらの遺体は連絡を受けた親族が当日夜から引き取りに来られましたが、身元不明者については、大光寺に安置されたのち、後日、阿村・伊勢の共同墓地へ運ばれました。その後、身元不明者 6 人の遺体は墓地に仮埋葬されました。戦後、犠牲者の親族が埼玉県などから守山へ来られましたが、今もなお何体かの遺体は人知れず阿村・伊勢の共同墓地の一角で眠りにについているのかもしれません。

戦後 75 年が過ぎ、空襲現場となった守山駅周辺も大きく変貌しました。小島秀治郎さんが隠れた駅前通りの家並も、Uさんが空襲に遭遇した守山駅旧駅舎も、重野重彦さんが隠れたレンガ工場も今はありません。伴作兵衛さんが逃げ込んだ地下道も大きく様変わりしました。空襲当時の姿を留めるものは、駅のそばにある被弾した六地藏と現場の線路だけかもしれません。

平和のために、忘れないで下さい。かつて滋賀県が、日々の列車通学さえも命の危険に晒される戦場となった戦争のことを…。



通過する列車と線路〔当館撮影〕

第25回企画展示『守山空襲』（会期：令和2年1月8日～7月12日） 展示資料一覧				
第1章 戦時下の守山				
番号	資料名	点数	資料説明	提供者・所蔵者
1	ポスター「ゑびす講大売出し」	1		個人所蔵
2	映画館「大黒座」のチラシ	1		個人
3	守山警察署のチラシ「歳末盗難予防」	1		個人
第2章 戦地へ向かった守山のひと				
番号	資料名	点数	資料説明	提供者・所蔵者
4	病衣	1	Oさん（守山市）の病衣	個人
5	陸軍服上衣	1	小林育三郎さんが戦地で着ていた軍服	小林幸子さん
6	陸軍服軍袴	1	小林育三郎さんが戦地で着ていた軍服	小林幸子さん
7	陸軍軍帽	1	小林育三郎さんが戦地で着ていた軍服	小林幸子さん
8	水筒	1	小林育三郎さん資料	小林幸子さん
9	コップ	1	小林育三郎さん資料	小林幸子さん
10	小鉢	1	小林育三郎さん資料	小林幸子さん
11	弁当箱	1	小林育三郎さん資料	小林幸子さん
12	日記	1	小林育三郎さん資料	小林幸子さん
13	防寒帽	1	Kさんが収容所で着ていた軍服	個人
14	軍服上衣	1	Kさんが収容所で着ていた軍服	個人
15	軍服防寒袴	1	Kさんが収容所で着ていた軍服	個人
16	スプーン（袋付き）	1	Kさん資料（シベリア抑留時に使用）	個人
17	食器	2	Kさん資料（シベリア抑留時に使用）	個人
18	従軍手帖	1	善野令子さん資料	善野令子さん
19	「昭和十八年滋賀県女子青年団中支嵐部隊慰問行」	1	善野令子さん資料	善野令子さん
20	図囊	1	Mさん資料	個人
21	ゲートル	1	Mさん資料	個人
22	Mさんから国防婦人会杉江班への手紙	1	Mさん資料	個人
第3章 日本本土への空襲				
番号	資料名	点数	資料説明	提供者・所蔵者
23	焼夷弾の筒	1	米軍が空襲に使用したもの	角野重喜智さん
24	爆弾と見られる金属片	5	米軍が空襲に使用したもの	武村友幸さん
25	機関銃弾破片	1	米軍が空襲に使用したもの	高居豊三さん
26	葉莢	1	米軍が空襲に使用したもの	日永源吉さん
27	葉莢	1	米軍が空襲に使用したもの	個人
28	伝単「空襲予告この都市が」	1	米軍が空襲に使用したもの	個人
第4章 空襲への備え				
番号	資料名	点数	資料説明	提供者・所蔵者
29	火たたき棒	1		個人
30	防空団屯所の旗	1		個人
31	防空用砂袋	1		個人
32	防火アンプル	1		國友義一さん
33	十七年式防空用防毒面	1		個人
34	防空頭巾	1		個人
35	布製バケツ	1		個人
36	『時局防空必携』	1		個人
37	灯火管制用電球	1		武村友幸さん
38	防空電灯カバー	1		個人
39	訓練用「空襲警報」札	1		個人
40	腕章「防空町内会長」	1		田村 栄さん
41	防空日誌	1		西村宏一郎さん
42	防空要員証	1		個人

第5章 滋賀県への空襲			
番号	資料名	点数	提供者・所蔵者
43	機関砲弾	6	武村友幸さん
44	高射砲弾（葉莢）	1	武村友幸さん
第6章 守山空襲			
番号	資料名	点数	提供者・所蔵者
45	絵画「電車」	1	小島秀治郎さんが子どもの頃に書いた電車の絵です。
46	主要列車時刻表	1	個人
47	機銃弾・葉莢	2	守山空襲に使用されたもの
48	Uさんの祖父の日記	1	個人所蔵
49	防火用水専用バケツ	1	個人
50	機銃弾	3	近江八幡の空襲に使用された機銃弾
51	建物部材 機銃掃射を受けた天井板	2	旧山中家住宅 天井1・2
52	建物部材 機銃掃射を受けた土壁	3	旧山中家住宅 垂壁1・2・3
53	建物部材 機銃掃射を受けた板壁	1	旧山中家住宅 垂壁4
54	建物部材 機銃掃射を受けた床板	1	旧山中家住宅 座敷の床板
55	建物部材 機銃掃射を受けた軒先	1	旧山中家住宅 縁側の軒先
56	鉄かぶと	1	個人